

日本近代—明治大正期の陽明学運動—

吉田 公平

一 はじめに

日本に陽明学が紹介された時に最も早い時期に読破した一人が林羅山であった。但し、朝鮮渡り本で読んだ形跡がある。それも王陽明などの所謂陽明学者の著書ではなくして、朱子学者の著した反陽明学書を介して読みこんだ。その典型が陳清蘭の『学部通弁』である。本書は陽明学は誤った教であると決めつけた。勢い林羅山は逆宣伝の路線で陽明学を酷評した。この林羅山を「鸚鵡」と酷評したのが若き日の中江藤樹(1608-1648)であった。自前で独自に思索すること無く、安易に新情報に飛びつく軽薄さをあげつらったのである。如何に生きるかを模索していた中江藤樹は初めは朱子学を学ぶが、最終的には陽明学に落着いた。日本における陽明学の開端者は中江藤樹である。藤樹門に熊沢蕃山・淵岡山の竜虎が登場し、特に淵岡山の門流が全国規模で陽明学・良知心学を生活信条とする人材が輩出する。また17世紀後半には朱子学を学ぶ人々が群れを成して登場するが、その中に明清の朱子後学が紹介する固定化した教条主義的な朱子学ではなくして、原朱子学を探索する人々が誕生する。山崎闇斎の一門である。しかし、この崎門学派の学風に疑問を抱き、陽明学に転向する者がいた。三輪執斎は佐藤直方の門人であった。三輪執斎には『標註伝習録』があるが、直門の川田雄琴が三輪執斎の講義を丁寧に記録している。中江藤樹の門流が各地で良知心学を生きたが、文書伝道には熱心ではなかった。彼等の学びは明治期まで持続されるが、その学びの成果は挙げて自筆写本で伝えられた。幕末期に佐藤一斎・大塩平八郎が登場して陽明学を鼓吹し、その門から俊秀が輩出する。幕末維新时期が陽明学の全盛期か。人材といい理解力といい、この時期の儒学者の心性論に対する取り組みは圧巻である。それは陽明学者ばかりではない。朱子学者も又賑やかに応酬し議論を展開していた。しかし、この時期の陽明学者は丁寧頻りに論議を展開しているものの、あくまでも各陽明学者の個人技であった。民間の結社を組織して機関誌を発行し木鐸として社会に訴えるという事はなかった。それが明治期後半になると、様相が一変する。陽明学を基本理念とする在野の結社を結成して定期刊行物として機関誌を発行する。勿論、組織化せずに個人的に活躍した陽明主義者もいたが、明治大正期の陽明学運動の特色は、民間の結社として活動した事にある。その代表的な結社について紹介することにしたい。

なお、旧来、井上哲次郎などの講壇の学者の著書に焦点を当てて陽明学を理解する向きがあるが、彼等はいわゆる学者であり、あくまでも知識の人であり、良知心学を生きた人々ではないことを確認しておきたい。学者として陽明学に多大の関心を示し、陽明学の基本文献を出版することに関与された。その功績は高く評価したい。後学が受けた恩恵は誠に大きかった。その出版史については、別の機会に俟ちたい。

二 幕末維新时期の群像

明治大正期の陽明学運動を語る前に、幕末維新时期の主な学者郡を紹介しておきたい。○印は陽明

学者、△は朱子学者、□は西学者である。

- 佐藤 一斎。1772-1859。安永1-安政6。『愛日楼全集』。『佐藤一斎全集』
- 大塩平八郎。1793-1837。寛政5-天保8。全集なし。『日本倫理彙編』。
- 吉村 秋陽。1797-1866。寛政9-慶応2。全集なし。
- 林 良斎。1807-1849。文化4-寛永2。『林良斎全集』吉田公平編。
- 春日 潜庵。1811-1878。文化8-明治11。全集なし。
- 池田 草庵。1813-1878。文化10-明治11。『池田草庵全集』。『山窓功課』。
- △大橋 訥庵。1816-1862。文化13-文久2。『大橋訥庵全集』。
- 吉村 斐山。1822-1882。文政5-明治13。全集なし。吉村秋陽の嗣子。
- △新宮 錦水。1827-1878。文政10-明治11。全集なし。
- △楠本 端山。1828-1883。文政11-明治16。『楠本端山碩水全集』
- △並木 栗水。1828-1914。文政11-大正3。全集なし。大橋訥庵の門人。
- △小笠原敬斎。1828-1863。文政11-文久3。全集なし。
- 西村 茂樹。1828-1902。文政11-明治35。『西村茂樹全集』。
- 西 周。1829-1897。文政12-明治30。『西周全集』。
- △山田 梅窓。1830-?。天保1-?。楠本端山の弟。碩水の兄。全集なし。
- 東 澤瀉。1832-1891。天保3-明治31。『東澤瀉全集』東敬治編。
- 中村 正直。1832-1891。天保3-明治24。全集なし。
- △楠本 碩水。1833-1916。天保4-大正5。『楠本端山碩水全集』。端山の弟。
- 福沢 諭吉。1835-1901。天保5-明治34。『福沢諭吉全集』。
- △大橋 陶庵。1836-1881。天保7-明治11。全集なし。大橋訥庵の養嗣子。

明治大正昭和期に活躍した人々。

- 加藤 弘之。1836-1916。天保2-大正3。
- 新井 奥邃。1846-1922。弘化3-大正11。『新井奥邃著作』。
- 中江 兆民。1847-1901。弘化4-明治34。『兆民全集』。
- 井上哲次郎。1855-1944。安政7-昭和19。全集なし。
- 井上 円了。1858-1919。安政5-大正8。『井上円了著作集』。
- 植木 枝盛。1857-1892。安政4-明治25。
- 植村 正久。1858-1925。安政4-大正14。
- 片山 潜。1859-1933。安政6-昭和8。『片山潜著作集』。
- 柏木 義円。1860-1938。万延1-昭和13。『柏木義円集』。
- 内村 鑑三。1861-1930。万延2-昭和5。『内村鑑三全集』。
- 新渡戸稲造。1862-1933。文久2-昭和8。『新渡戸稲造全集』。
- 岡倉 天心。1862-1913。文久2-大正2。『岡倉天心全集』。
- 清沢 満之。1863-1903。文久3-明治36。『清沢満之全集』。
- 大西 祝。1864-1900。元治1-明治33。『大西祝全集』。
- 夏目 漱石。1867-1916。慶応3-大正5。『夏目漱石全集』。
- 鈴木 大拙。1870-1966。明治3-昭和41。『鈴木大拙全集』。
- 西田幾多郎。1870-1945。明治3-昭和20。『西田幾多郎全集』。
- 姉崎 正治。1873-1949。明治6-昭和24。

幕末期に活躍した儒学者達は明治維新以後に廃藩置県が実施されると、藩士ではなくなり処士(民間人)になるので、概ね嘗てのような活躍の舞台を失う。もはや西学に開眼した人達が論陣を張る時代になった。(例、『明六雑誌』『同人社文学雑誌』など)。明治時代を画期するのは、明治22年

の『大日本帝国憲法』、明治23年の『教育勅語』の発布である。明治政府の基礎固めが出来た。この時期までは自由民権運動・欧化主義に象徴されるように、国運の将来像を描く運動が自由に模索された時代である。この後、日清戦争（明治27・28）日露戦争（明治37・38）が学術思想界の趣向を転換させる。欧化主義を反省して伝統文化を再評価する機運が醸成された。西学を主張していた人達も、この流れに棹さすことになる。（例。）内村鑑三『代表的日本人』。西村茂樹『日本道德論』など。明治大正期の陽明学運動が勃興してくるのは、日清戦争の後に『陽明学』を発刊した吉本襄、日露戦争の後に『王学雑誌』『陽明学』を発刊した東敬治、『陽明』『陽明主義』を発刊した石崎東国、この三人が推進者であった。

三 吉本襄の『陽明学』

吉本襄の生卒年は、伝記資料の調査が不十分なために、分からない。勝海舟の『氷川清和』の編者として著名であるが、原載の文章を歪曲して編纂したとして酷評される。現行の『氷川清和』は松浦玲らが新たに編集したものが講談社から刊行されている。

国会図書館に所蔵される、吉本襄の著書及び吉本襄が鉄華書院から刊行した著書を紹介しておきたい。極めて不十分なものです。識者のご教示を切望します。

高島炭坑々夫ノ惨状ヲ述ベテ世ノ志士仁人ニ告グ。吉本襄。明治21年。

西海孤島千条の涙。吉本襄。觚哉庵。明治22年。

古本大学旁註。戴聖・王陽明。明治29年。『陽明学』五号広告。

王陽明先生新墨本。『陽明学』五号広告。

読書操觚之鍵。大野雲潭著。『陽明学』五号広告。

方谷遺稿。山田方谷著。三島中洲編纂。『陽明学』六号広告。

海舟先生氷川清和。正・続（明治29年）・続続。吉本襄撰。無辺俠禅渡邊国武題詞。明治29年30年32年。（『陽明学』38号・39号・40号広告）。

狂簡文房（明治35年）河野成光館（明治42年）大文館書店（昭和8年）でも刊行。

五十名家語録。平田勝馬著。明治31年。

伝習録講義。卷一。尾崎忠治著。明治31年。『陽明学』25号広告。

日本之陽明学。高瀬武次郎著。明治31年。再版。明治32年。

名家文話。内田鉄三郎著。明治32年。

陽明学講話。高瀬武次郎著。明治32年。

鎌倉参禅個中の消息。無休庵主人著。明治33年。

経筵進講録。元田永孚著。明治33年。

男子八景婦人六相。麻衣道人著。明治33年。

読書と静坐。吉本襄著。狂簡文莊。明治34年。

良知。中尾捨吉著。参天閣。明治40年。

吉本襄が陽明学運動の開拓者として理解されているのは、鉄華書院を立ち上げて主幹として機関誌『陽明学』を発刊したことによる。創刊は明治29年7月5日。明治33年5月20日発刊の79・80合併号が終刊である。

王陽明の儒学思想は王学とか姚江学と呼称されるのが通例であったが、吉本襄の『陽明学』が普及するにつれて、「陽明学」という呼称が日本はもとより、中国・朝鮮でも使用されるようになった。

この鉄華書院版『陽明学』は昭和59年9月に四冊本として影印出版されている。監修者岡田武彦、発行者田中嘉次、印刷文言社、製本大口製本印刷株式会社、発行所図書出版木耳社。影印する

に当たり、岡田武彦先生の「総論」「解説」「陽明学総目次」が第一巻の巻頭に掲載されている。

発刊の辞、廃刊の辞に、吉本襄の『陽明学』刊行の意図がよく表明されているので、長文ながら、全文を紹介しておきたい。段落番号は私に附けた。

発刊の辞（第一巻第一号。巻頭。明治二十九年七月五日発行）。

①個人は本然の任務有るは、猶ほ国家に自然の任務あるが如し。此任務や至高至大、個人に在ては自主と為り、国家に在ては独立と為る、而して天下の大経を経綸し、天地の化育を賛成し、世界の文明を裨補する未だ曾て其の本領たらずばあらず。苟も個人として此任務を盡せば、則ち其人は聖人たり、大人たり、至人たり。国家として此任務を盡せば、則ち其国は強国たり、雄国たり、大国たり。然れども此任務を盡すは、道を盡すに在るのみ。

②道とは、天地自然の道也。人生至善の道也。斯道や、自ら靈妙、自から円満、自から正大、自ら光明、自ら又活潑々地、釈迦牟尼の唱ふる所、耶蘇の唱ふる所、孔子の唱ふる所、老子の唱ふる所、乃至近世哲家韓図、歌傑爾の唱ふる所、其の名同じからずと雖も、彼等一世の苦心、斯道を盡さんとするに在りき。道は大小無く、精粗無く、厚薄無しと雖も、教派は、千種万様、決して一なること能はず。是に於てか或は珠数を拈して釈尊の下に跪座する者有り。或ひは十字架を取りて天主の前に拝伏する者有り。或は深山幽谷の中に在て、枯座黙照する者有り。或は冥想独坐、宇宙幽玄の理を自覚する者有り。彼等の道を求むる、亦各自ら信ずる所有り。吾人は敢えて之を咎めざる也。否之を咎むることを欲せざる也。

③ただそれ東邦倫理の大道義を看透し、之を我国固有の風氣士道に照らし、之を宇内通有の大原理にし、敢て悖らざるものは、儒家の大道を發明したる陽明学乎。陽明一生の工夫は、「致良知」の三字に外ならず。而して至精、至明、至妙、心を盡し、性を盡し、道を盡すの極致復餘蘊無し。陽明曾て曰く「某嘗説。知是行的主意。行是知的功夫。知是行之始。行是知之成。若会得時只説一箇知。已自有行在。只説一箇行。已自有知在。」彼は空言以て自ら高ぶるものに非ず、知行合一、自ら得る所有る也。故に曰く「吾学得之九死一生中」と。其活眼活識。迂儒の能く窺ふ所ならん哉。

④蓋し一人の精神は、千万人の精神也。個人の任務を竭す也。一人の精神豪毅なれば、一国の士気安ぞ発強活潑ならざるを得んや。隨て一人暴戾なれば、一国暴戾に、一人不仁なれば、一国も亦不仁に陥る。其の影響する所、豈少小ならん哉。而して個人の涵泳修養は、主として知行合一に在り。知行合一の教は、主として陽明学に待つある也。陽明学は、今日の人心を陶冶し、一代の風気を革新する一大興奮劑也。

⑤今や、我国は、東邦新興の一大雄国として、其任務を竭さざるべからざる位置に立てり。然れども事物の日に輕便に趨くに随ひ、一国の風氣漸く卑下に傾き、文物の愈々進歩するに随ひ、一国の風俗益々浮薄に陥り。機関の次第に完整するに随ひ、一国の士気漸く萎靡するを見る。而かも偉人傑士の起つて以て世道人心を風動するものなし。是れ豈社会風教の爲めに一大猛省を發せざるべからざる時に非ずや。吾人の陽明学を今日に研究するは、心学修養、人才陶成の爲めに外ならずと雖も、天下の人々をして個人本然の任務あるを知らしめ、延て以て一代の風気を革新し、国家に裨補する所あらば、則ち洵に吾人発刊の本懐也。

廃刊の辞（七十九・八十号合本。巻頭。明治三十三年五月二十日発行）

我が『陽明学』は、発刊以来、歳を閱すること五、号を重ねること七十有九。吾人は茲に筆を収めて廃刊せんとするに当り、豈、一言の読者に告ぐる所なかるべけん哉。

顧れば、征清の役後、戦勝の結果として、社会を挙げて、虚名浮榮に沈溺し、政治、經濟、宗教、教育、文学等、何れの方面に於ても、大なる真実なく、大なる気魄なく、大なる熱血なく、目前の浮華虚飾を求むるに汲々たらざるは莫かりき。吾人深く之を慨し、鹿川宮内黙蔵氏等と相謀り、財を投じて『陽明学』を発刊し、我が精神界の修養に資する所あらんとせしは、即ち

去ぬる明治二十九年初秋の交にてありき。当時吾人は逆境に処して、幾多の敵と戦ひ、幾多の攻撃を蒙れり。然れども、吾人は、屹然此間に処して、敢て精神界の改革を謀り、社会良心の麻痺を救ひ、国民品性の墮落を回さんとせり。事、志と違ふと雖も、而かも独立独行、其の言はんと欲する所を公言し、其の信ずる所を主張するに至ては、数年一日の如くなりき。嗚呼、十室の邑、忠信、丘の如きものあり。天下の大、社会の広き、豈、一人の知己なからんや。世の識者は、同情を吾人に寄せ、国論も亦漸く正に趨かんとし、世人稍や精神修養の忽にすべからざるを唱へ、青年子弟も亦徳性の学を研究する者あるに至りしは、此の一兩年間に於ける社会の傾向なりとす。今日の社会に道念なく、国民に理想なく、政治、宗教、経済、文学、何れの方面に於ても、大なる光明なきことは、依然たりと雖、而かも国人、精神修養の急を認め、社会の墮落を痛撃するの聲、益々熾んなるに至りしもの、是れ豈、独り氣運の然らしむるのみなりとせん哉。我が『陽明学』首唱の功や、吾人自から其の没すべからざるを信せんと欲す。我が『陽明学』は、本号を以て、其主眼たる『伝習録』の講義を終りしを期とし、茲に廃刊を告げ、次で『修養報』を創刊し、以て我が精神界の修養に資し、社会の靈魂を開拓し、世道人心の木鐸たらんと欲す。冀くば江湖諸君の、吾人の本意を諒とせられんことを。

鉄華書院編輯局に於て 吉本襄 謹啓。

日清戦争に勝利した後の日本の精神界が退嬰せる時局を適切に対応できていないことを痛切に受けとめて、『陽明学』を刊行して「世道人心」を匡正しようとした。又所期の目的を一応は達成したので、一旦は『陽明学』を廃刊して、新たに『修養報』を刊行する決意であることを表明している。目的は同じであるが、陽明学の枠組みを超えて「修養」の氣運を盛り上げることを目指したのであろうか。『修養報』が刊行されたのか否か。現物を確認していないことを遺憾とする。又、「廃刊の辞」の中で、発刊当時を振り返って「当時吾人は逆境に処して、幾多の敵と戦ひ、幾多の攻撃を蒙れり。然れども、吾人は、屹然此間に処して、敢て精神界の改革を謀り、社会良心の麻痺を救ひ、国民品性の墮落を回さんとせり。」というが、この「逆境」の実情を把握し得ていない。ここで「精神界の改革」を目論んだことを告白しているが、清沢満之が主幹した『精神界』の発刊は明治34年1月。『陽明学』発刊はその五年前である。一連の精神界改革運動の先蹤であったか。

四 『陽明学』の記事内容の特色

主幹である吉本襄の署名（吉本襄・吉本鉄華）入りの場合、勿論吉本襄の執筆である。他に「院説」「鉄華書院主人」「編者」も吉本襄の執筆であろう。但し「院説」は同調者であった宮内黙蔵も執筆しているので、個別に確認する必要がある。無署名の文章も吉本襄の執筆と見なして大過あるまいと思われる。或いは宮内黙蔵が執筆しているかも知れない。論説の基調は「発刊の辞」「廃刊の辞」に表白された基本的視座を基底にした時事論・学術論である。当代の識者の一論調を視るのに恰好の論説である。「王学此より勃興せん」（60号）など、吉本襄の意気込みが露わににじみ出ている、興味深い文章が数多掲載されているが、その一々については紹介しない。

論説覧に掲載された執筆者の中では、後に農本主義者として活躍する権藤震二、J・S・ミルの「利学」を批判した陸義猶などが特異である。論壇覧には所謂陽明学の学術・振興に大きな役割を果たした人物が勢揃いする。井上哲次郎、山田準、三島毅（中洲）、渡邊国武（池田草庵の門人。京都府知事）、高瀬武次郎（京都帝国大学教授）などは常連の筆者である。中であって、朱子学者の大野雲潭、独自の心学運動を展開した足立栗園、倫理学者の中島力藏など、陽明学の枠にはまらない異色の人物である。

この種の機関誌には講義物が欠かせない。吉本襄と盟友であった宮内黙蔵（号鹿川）は創刊号か

ら終刊号まで『伝習録』『伝習録講義』を連載した。鉄華書院版『陽明学』は宮内黙蔵が『伝習録』の講義を終了するのを待って終刊することになった。他に三輪執斎の『古本大学和解』『四言教講義』、土屋弘の『王文評釈』、田中従吾軒の『王陽明出身靖乱録』、桂湖村の『王詩臆見』などがある。「附録」を別立てにして熊沢蕃山の『中庸小解』、山田方谷の『古本大学講義』、奥宮慥斎の『聖学問要』、吉村晋の『格致贖議』、熊沢蕃山の『源語外伝』『集義和書抄』『論語小解』、吉本襄の『古本大学集解』『王陽明先生則言』、西川季格の『集義和書顕非』、中根東里の『新瓦附録』、吉田松陰の『講孟劄記』などと、陽明学に関する基本著書の紹介に努めている。

中において異色なのは、鈴木無隠の『論語講義』と川尻宝岑の『莊子俗語』である。鈴木無隠は河井継之助に兄事した人物である。河合継之助は著書を残さなかった。河井継之助は西国を旅行した際に、備中松山（現高梁市）に立ち寄り、家老をしていた山田方谷に師事した。河井継之助は陽明学に関心が深かったが、その心性論には興味を覚えなかった。それは昌平坂学問所に学んだ時にも同様であった。そのころ同じく昌平坂学問所に学んでいた鈴木無隠は河井継之助に親炙して兄事した。河井継之助は西国旅行を終えた後に越後長岡藩に帰り家老職に就き、大胆に藩政改革を実施した。そのモデルが山田方谷の備中松山藩改革であった。河井継之助が山田方谷に学んだのは個別的な改革案ではない。改革の基本的姿勢・気迫・使命感といってもよい。日本における所謂陽明学には、大きく言って、二つの流れがある。一つは中江藤樹・淵岡山に代表される。独りの人間として如何に生きるかを主題にして、生身の人間（心）とあるべき在り方（性）をめぐる所謂心性論に重点を置く流れである。もう一つは、心性論は一個人の生き方に確信と勇気を与えるであろうが、それは一個人として安心立命を悟得するという上では貴重な知的資源ではあるが、如何に心性論が精緻に構築されたとしても、これだけでは社会的成果は挙げられないという流れである。その代表者は熊沢蕃山である。熊沢蕃山の中江藤樹入門は劇的である。熊沢蕃山は中江藤樹に邂逅できたことに深く感謝している。しかし、それはそれとして、心性論のみでは政治的成果を生むことは不可能であることを断言している。河井継之助はこの熊沢蕃山の流れに属する。

ここにみられる二つの流れは、実は儒教・儒学の流れの中で、機会ある毎に論議された論題であった。朱子学・陽明学に代表される新儒教は修己と治人の二つを焦点とする楕円形の思惟構造を特色とする。理念型として両者相須って展開されることが望ましい。朱子や王陽明の立論は極力両焦点を平衡の取れた形に仕上げることを目論んでいる。しかし、中国でも日本でも、当事者の置かれた社会的な立場の相違などに促されて、何れか一方に重点が置かれることが通例である。

河井継之助は治人に重点を置いた。藩政の中で期待された役割が促したのである。勢い河井継之助は心性論に関する著書は残していない。西国旅行の備忘録である『塵壺』が今、平凡社学術文庫に収録されているが、これとて公表することを心して記録されたものではない。あくまでも個人的な覚書である。昌平坂学問所に学び、山田方谷に師事した河井継之助は陽明学者に数えられるが、心性論者としては刮目するには当たらない。寧ろ治人の現場で王陽明の精神を生きた実践者であるといえる。その実践記録であって実践論ではない。司馬遼太郎の『峠』の主人公として活写されて特異な陽明学者として高い評価を得ているが、その人物像とか個々の瑣事にわたる生き方考え方については、関係資料が極端に少ないのが実情である。このことについて貴重な証言を残したのが鈴木無隠であった。鈴木無隠は吉本襄が主幹する『陽明学』に『論語講義』を連載し、その中で河井継之助について熱く語っている。司馬遼太郎も河井継之助の人物像を叙述する際には鈴木無隠の記録を参照した形跡がある。幕末維新时期・明治期に数奇な人生を送った鈴木無隠その人の生き方も興味深い。彼が河井継之助について貴重な証言を残していたことは瞠目に値する。この鈴木無隠と吉本襄との接点が分からない。吉本襄の経歴が不分明なので致し方がない。この鈴木無隠のちに石崎東国の『陽明』に頻りに登場し、そこで河井継之助の言行を証言していることは、誠に興味深い。

もう独り、特異な投稿者として川尻宝岑（かわじりほうきん。1842-1959）がいる。儒學者の世界では全く言及されることのない人物である。小生も不案内な人物なので少しく長文ながら、参考までに『国史大事典』（吉川弘文館）の当該綱目を紹介することにする。

明治時代の歌舞伎脚本作者。心学者・禅学者でもあった。本名義裕、一竿斎宝洲・忘路庵と号した。天保十三年（一八四二）十二月十八日、江戸の鼈甲問屋に生まれ、八代目彦兵衛を相続。二十歳で神道禊教に入り、のち権大僧正となる。また独学で石門心学を修めた。鎌倉円覚寺に参禅して今北洪川に師事、『(和訓略解) 禅林句集』『坐禅之捷径（ざぜんのはやみち）』などの著書がある。代々市川團十郎をひいきにする芝居好きの商家であったため、九代目市川團十郎と親しく、明治十六年（一八八三）ころから歌舞伎脚本を執筆、『新開地梅田神垣』（明治二十一年）、『文覚上人勸進帳』（同二十二年）は團十郎によって初演された。また伊井蓉峰らの改良演劇済美館に『名大瀧怨恨短銃（なおおたきうらみのびすとる）』（同二十四年）を書いた。依田学海の活歴劇『吉野拾遺名歌誉』、末松謙澄作『小楠公』、長田秋濤作『菊水』などの新脚本も、実際には宝岑の手になるものだった。作品は五十余編、忠孝仁義を主題としながらも、新趣向をとりいれ、義理人情をもちこんだ。宝岑は、局外者を容れなかった歌舞伎界に、素人の書いた脚本を送りこんだ最初の人であった。同四十三年八月十日箱根にて没。六十九歳。深川法善寺に葬られる（法善寺は戦災で焼失し、墓は今千代田区外神田の神田寺の管理となっている）。法名は唯仁斎心誉宗静宝岑居士。

禅学・心学に参学し、歌舞伎界に深入りして脚本まで書き上げたという。実に多彩な活躍をした人であることに驚かされる。吉本襄主幹の『陽明学』には「莊子物語」が連載されている。心学の立場から『莊子』を説き起こしたものである。川尻法岑が参学したという心学は石門心学のことをいう。心学は如何に生きるかという課題に役に立ちそうなものは、学派を問わずに何でも我が陣営に取り込んで参究するのが常であったから、川尻法岑が『莊子』を持ち出しても少しも不思議はない。もと京都で隆盛した石門心学は江戸時代の後半になって江戸市中に普及した。明治期になると寧ろ東京が石門心学の一大中心地になった。そのなかでの心学研鑽である。川尻法岑には他にも心学絡みの著書もある。この東京の石門心学運動に渦中に鈴木大拙や西田幾多郎も参与していたことは、余り知られていない。鈴木大拙も西田幾多郎も今北洪川との縁が深い。川尻法岑とは同門であった。広義の心学の中で、各自がそれぞれに独自の路線を歩んだことになる。明治期以降の心学運動をあらためて検証すると、これまでとは異なった理解が得られるかと思う。この広義の心学運動の一環として、吉本襄が主管した『陽明学』を見渡すことが肝要なのであろう。このことを痛感させるのが川尻法岑の登場である。

五 おわりに

吉本襄の『陽明学』が短期間で終刊を迎えたのには、吉本襄自身が機関誌『陽明学』を刊行したその目的をより端的に訴える爲に『修養』を発刊することを決意したということが主要な要因であったのかも知れない。しかし、その『修養』は刊行されなかったようである。再出発の意図は頓挫したことになる。『陽明学』が永續しなかったことの要因の一つには、あくまでも吉本襄独自の個人誌であったことではなかったか。換言するならば、発行母胎を組織化できなかったことのために発行の継続を困難にしたのではなかったか。組織化できなかったことを象徴するのは、一つには規約の不在である。二つには役員の組織がなかったこと。三つには会員組織がなかったこと。その爲に安定した購読者に恵まれなかったこと。四つには執筆陣が吉本襄と個人的に関係する人達に限定されたこと。ただし、宮内黙蔵の他は、執筆陣が吉本襄との親密度の濃淡は今一つ分からない。吉本襄その人の生涯について、詳細については未だ承知していない。このことについては今後の課題

としたい。博雅の士の御教示を待つこと切実なものがある。

日本近代における陽明学運動を俯瞰しようとするときには、吉本襄・『陽明学』は何をさておいても始めに目を注がなければならない存在なので、以上の素描を試みた次第である。鉄華書院版『陽明学』が廃刊された後に、東敬治は『王学雑誌』を創刊し、その後継誌として『陽明学』を刊行した。合わせて二百四十余号である。又石崎東国は『陽明』『陽明主義』を刊行する。合わせて百四十八号である。共に経営は多難であった節があるが、ともかくもこれほどに継続できたのは、個人誌であることを回避して、固有の組織を組み立て、既訳を設け、購読会員を広く求めたからである。彼等が吉本襄の鉄華書院版『陽明学』を熟知していたかどうかは確認できないが、ともあれ彼等は吉本襄・鉄華書院版『陽明学』の轍を踏まなかった。

キーワード：吉本襄、陽明学、心学、鈴木無隠、河井継之助、宮内黙藏